

詠む

毎日歌壇

米川千嘉子選

あかちゃんにさわって育てたところひろ 同  
 昔よりかかる我 つくば市 松井るり子  
 △評▽いわさきちひろの言葉だ。作者もそ  
 のように育てたことがよき思い出。現代の  
 子育てに少し不安を感じているのか。

一字一句意味ある経が通り過ぐ四十九日の春  
 風に乗る 横浜市 斎藤 博道  
 △評▽故人が仏になる節目の法要。般若心  
 經の空の思想が春風に乗ってゆく。

雪とけて春の陽さんさん女性はや帽子を被り  
 日傘差しゆく 鶴岡市 大沼 葉子  
 ゲレンデで一番上手に転ぶから見えてひとり  
 で立ち上がるまで 東京 遠野 鈴  
 百歳のお祝い母は喜ばぬ生きる辛さが真ん中  
 にある 盛岡市 内藤 賢一

戦争にたかる人らはスーツ着て死出虫のごと  
 靴光らせて 静岡市 小川 健治  
 引越しの荷物を包む新聞に未だ二万の避難  
 者あり 宮崎 門田 祥子  
 オペラ書メソナへにテーマ浮かびへる「もう  
 騙されまいぞこの我は」藤沢市 井上 渚  
 子守歌うたひつつ夫を看取りし友添ひ復した  
 とふ最後の時を 福岡 中村 伸子

筆記することない名前指で書く旅立った人を  
 忘れぬために 千葉市 田中 文雄

加藤 治郎選

ただ海を見ていただけです岬には母さまみた  
 いにきれいなお船 フランス 小仲 翠太  
 △評▽風景画のようである。母さま、お船  
 といった言葉つかいに健やかな幼年期が思  
 われる。母は遠ざかってゆくのだろう。

草原の小径へ続くオルガンが母が弾いている春  
 眠の中 川崎市 新井 将  
 △評▽夢のスケッチである。オルガンは家  
 の外にあるのだろう。やさしい風景だ。

本棚に空間がまだとってあるあなたを閉じ込  
 めてる雪国 平塚市 芝澤 樹  
 今日もまた回転ドアを通れない弾き出される  
 あちらとこちら 飯塚市 白木 小鳩  
 小房にしていくフロコリーああこれが形な  
 んだな虚しさの 横浜市 あ や

笑っちゃうほど降っていた偽物の花びら僕ら  
 だけさよならだ 大津市 世田 夏雪  
 わたくしは青空人間 九十の友は言ひたり雨  
 は見ないと 津市 川原田明子  
 信号の赤に立ち止まるわたくしをビル風だけ  
 が追い越してゆく 新座市 睦月くらげ

馬鹿だもん、あたし、と言えば夕焼けの赤色  
 すこし濃さ増してゆく 所沢市 神田 望  
 にゃあという声においでと呼んだとて おまえ  
 が来いという顔をして たつの市 浅水 しお

水原 紫苑選

カルガモがひかりのなかをたゆたこて戦争を反対す  
 るのに理由は要らないさいたま市 雨谷 詩穂  
 △評▽カルガモの描写が美しく、自然に下  
 の句に引き込まれる。誰も内心ではそう思  
 うのだろうか。

薔薇だつて眠い。真夜中まどろんで薔が一枚  
 二枚外れる 甲府市 村田 一広  
 △評▽おかしくてリアルである。作者は本  
 当にその世界にいるのだろう。

さみしきはまぶたに青い 神は夢を星へと写  
 しとる画家だった 東京 山野ゆかり  
 うつくしい異動つてとんだらう白鳥はも  
 ういませんでした 横浜市 永永 キヌ  
 神様のかたちを暫し考えて湯船にひとつ涙が  
 落ちる 東京 境 千尋

らびりんす・夢を調伏できたなら・めびう  
 す・きみの竜胆になる 東京 珠海 ユラ  
 螺鈿めくひとひらのひかりの翅は振り向くま  
 では見えていたもの 宝塚市 白川 楼瑠  
 まごぎわの白鳥わたしの頭より化学反応式を  
 盗めり 国立市 蔵 井

どこまでが生なのだろう崩れたる薔薇の花弁  
 は薔薇いろのまま 東京 無地ムジカ  
 太陽は誰の罪をも裁かざり舗道に昏き影を刻  
 めり 所沢市 里見 脩一

伊藤 一彦選

わたくしが母と見入りし瑛九の花に息子は  
 腕を組みをり さいたま市 山口 晋裕  
 △評▽天才的な画家・瑛九の作品をじっと  
 見つめる息子の姿にかつての自分を思い出  
 している。息子への深い愛が感じられる。

旧姓に戻ったけれど不可思議で新たな私始ま  
 る予感 茅ヶ崎市 小林 香織  
 △評▽前に名乗っていた点では旧姓だが、  
 「旧」姓を「新」姓として生きる意欲。

一刻を争うことを手放して二面列車の方言ま  
 ろし 川崎市 ななつの  
 あと少しも少しだけ少しだけ指先を見て立  
 つアラバスク 宮崎 門田 藍子  
 春潮はああ春潮の匂いしてっーんと何かが我  
 を抜けゆく 垂水市 岩元 秀人

遠目にも枝へと春は宿りたり夕べの桜ほの紅  
 く立つ 東京 奥山 和  
 イランシリアアベズエラ気がかりな国 留学  
 先で出会いし仲間 藤沢市 井上 渚  
 その傘は立派だけれど折れやすくすべての雨  
 をはじくでもない フランス 小仲 翠太

横たはる老猫の背にままごのケーキを採は  
 並べてゆけり 豊中市 赤木 菜花  
 駅に行くスタバで働く友を見て手を振ってか  
 らはじまる生活 国分寺市 横林なな子

投稿規定

はがき1枚に  
 選者を指定し、  
 未発表の自作を  
 2首・2句まで。住所、氏名、年齢、  
 職業、電話番号を明記し、宛先は  
 〒100-8051(住所不要) 毎日新聞  
 学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句  
 は「毎日俳壇」、○○先生(希望選  
 者名)係へ。毎日新聞デジタルの投  
 稿フォーム(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けて  
 います。  
 他媒体との二重投稿や、同一作品  
 を複数の選者に投稿するのは厳禁で  
 す。投稿は趣旨を変えずに添削する  
 ことがあります。  
 入選作は毎日新聞社の電子メデ  
 アやデータベース、アプリ「俳句て  
 ふてふ」で公開し、本社が作成また  
 は許諾した出版物やメディアに掲載  
 することがあります。